

わたしのオブザーベーションズ (I)

—自由・他者への尊敬・教師・人生—

マリヤ・リー・ベナビデス



幼稚園における教育の方法は、その創始者たちが指示して以来そのまま続いているように、厳しくあるべきものではなく、幼児社会の特徴や必要とする事に適応させた上で、先生は幼児各自についての知識に基づいて実行していくべきものだと思います。そして「子どもはグループとしてではなく、一個人として把握されなければならない」と思います。この事がまた、教師各位が、献身と愛情によって示されておられますように、お茶の水幼稚園での主要な特徴の一つとなっております。

保育するのに使われる方法に従えば、私たち教師は、必要に応じて、幼児の手助けをし、そうする事によつ

て、その子どもたちの小さな力、責任感、イニシアチヴ、勝利の観念が刺激され、性格と人格をうまく形成してゆくための力を獲得していくようにするのです。

前に「幼児たちはグループとしてではなく、個人として把握されねばならない」と申しましたが、しかしながら、私たちは、グループの中の他のメンバーを尊敬する事も教えなければなりません。たとえば、数人の子どもたちがへやの中で劇をしていて、他の子どもたちがすぐそばでボール遊びをするなら、私は、ボール遊びをする子どもたちに、友だちの邪魔にならないような他の場所を探すよう頼む事は、正しい事だと考えます。

私は、こうする事で、私たちの意思を強制するとか、子どもたちの自由を制限する事になるとは思いません。そうではなく、子どもに、他人をうやまう事を教えているのだと思います。幼稚園の基本的目的の一つは、お互いを尊敬しながらの協調を基調にして、共に生きてゆけるように社会性を身につける事にあるからです。

自由教育を実行していると、各人が必要に応じて自分の人格をみがく事ができて、素晴らしい道が開けてきます。しかしまた、私たち教師が考慮に入れなければいけない危険に直面する事もあります。そしてその時は、私たちがそれを解決し得るのだという事を心得ていなければなりません。

1 日常活動の割当てや計画がないことにより、指導的能力をもつ子どもたち、つまり親分格の子どもが、弱い者の意志を独占したり、命令したりする危険性がある。

2 内気な子どもたちが、他の子の提案した遊びには、絶対に加わらないという危険性。

3 自分たちだけで満足する子どもたちは、遊びの

変化がなくて、その結果、単調さや繰返しにおこしている事がある。

私は、先に述べた見解が、子どもたちの自由と教育の障害とまではならないと思うが、教師によって考慮されなければならない事は事実です。先に述べた状態になった時に、ただちに解決できるように、常にほとんどすべての子どもたちに特別な注意を払う事が必要です。そして子どもたちの性格を害する事は許されません。この事は、教師の側の肉体的、精神的に大きな努力を意味しています。なぜなら、不断の注意が必要とされるからです。

子どもたちが自由に作業を行なうよう放置すれば、結果的に、一斉の活動に差がでます。たとえば音楽をきいて、それを好きなように解決するよう子どもたちに求めると、ぐるっと回転する子もあれば、踊る子もあるでしょう。またお菓子を入れる容器を何か作るようにいえば、ある子はコマを作り、ある子は自動車、別の子はテレビのカメンライダーの登場人物を選ぶでしょう。そうして各自が切り細工をして、自由にそれを組み立てるでしょう。しかし、これらは、当然、先

生の手で巧みに助けられての事であります。子どもたちの自由にまかせるこの方法では、全体としての統一された美しさはありませんが、しかし、たとえ、同じようなものをつくる結果になったとしても子どもたちが各自が、独創力と想像力を用いて、自分たち独自のものを創り出す事ができます。

子どもたちと同様に、教師も自己を表現する必要があります。しかし教師が、子どもたちの活動のほぼ全体を計画する時には、子どもたちの自由な自己表現を制限しながら、彼女は自己表現しているのです。それゆえ、すべての先生が、その人格に応じた表現と楽しみをもたらず活動を、学校の内外で行なう事は、非常に重要な事であると思います。

教師が、子どもたちのすべての活動の計画をたてるという事に関して気のついた主要な欠点は、子どもたちの自己表現を妨げ、現実からそれを遠ざけている事です。ところが幼稚園は、現実の生活の一部分でなければならぬのです。なぜなら、人間の生涯のうちで、いかに物事が進展して行くかについての確信性をもてる境遇は、数少ないからです。人間は、賢明な自然の

一部をなしており、自然に比較できる境遇をもつものです。たとえば、私たちはいつ天候が悪くなるかは分かりませんが、どの程度で、どのくらい雨が続くのかは、私たちが自身と、第二に私たちをとり囲む人々との調和において、できるだけじょうずに、それらの異なった境遇に生きる事を学んだという事です。知恵を働かせて、雨から身を守り、喜びを胸に、日の出を待つ事を知る事を子どもたちに教えましょう。

マリヤさんは、昨年十一月にメキシコから日本へ、幼稚園教育の研究にいらっしゃいました。スペイン語の全然通じない、お茶の水女子大附属幼稚園で過ごされて半年、日常生活に必要な日本語は大体マスターされ、園児たちも「マリヤ先生」「マリヤ先生」となつていきます。丸い目の、はつきりした顔だちの愛くるしい先生です。もちろんメキシコでも幼稚園の先生として経験数年の方です。